

片山洋子作 「13日の金曜日」

(音楽) (不気味な感じ。次のモノローグのBGMに)

金子直美 (夢でうなされる)うー。な、何これ？ あ、く、苦しい。重いよー。だれか、だれか助けて。はあ、ゆ… 夢なの、これ？ ううん、違う。だって、目は開くけど、か、体が全然動かないよ。浩、浩ってば。起きてよ、ちょっと。浩！ あれ、声も、声も出ないの？ 隣に寝てるのに、お前はなんでもないの？ なんなの、これ？ うーん、重い。部屋中の空気がみんなわたしに向かって圧縮されてるみたいだ。苦しいよー。どうして動けないの？ なんなの、一体これは?!

直美ナレーション わたし、金子直美。高校2年の女の子。ある夜、突然わたしはなんだか訳の分からない恐ろしい現象に遭遇してしまった。

(効果音) (学校のガヤ)

女子1 えー、ほんと、直美？ 怖かったでしょ？

直美 うん！ もう、どうなっちゃうのかと思ったよ。

田中恵子 夢だったんじゃないの、直美？

直美 違うよ、恵子。しっかり意識あったもん。夜中の1時43分。そう、確かに柱の時計見たんだから。

男子 ふーん。じゃ、ほんとにほんとだったんだ。

女子2 怖いよねえ。そんなのにさ、…(FO)

ナレーション わたしは、昨日の夜の出来事を一生懸命に話した。友達に聞いてもらいたかったし、どういことなのか、教えてもらいたかったのだ。と、そこへ、数日前に転校してきたばかりの片柳友子が近づいてきた。彼女は独特な雰囲気を持っている女の子だった。

片柳友子 ああ、それね。それはね、“金縛り”っていうのよ。

直美 カナシバリ？

女子1 あら、片柳さん、知ってるの？

女子2 なあに、その金縛りって？

友子 “何”って言われても困るけど…。わたしもよく金縛りに遭うのよ。ついこの間は、金縛りに遭ってる最中に、おじいさんの顔を見たわ。6年前に亡くなってるけどね。

男子 ヒエー！ じゃ亡霊じゃない、それ！

友子 そ、まあ霊の一種かしら。

女子2 わあ、怖そう。

友子 そんなことないわ。そういうのはみんな、わたしに会いに来てくれるんだし、それにわたし、ほかにもそういう体験してるしね。

恵子 ほかの体験って？

友子 わたしはいつも未来を見通すことができるの。何が起ころうとしているか予知できるのよ。

生徒
ナレーション (口々に)「えー！」「ウツソー」「ほんと？」「信じらんない」etc.
 みんな、片柳さんの発言に驚いていた。でも、正直言って、「信じられない」とも言いがたい何かを彼女は持っていた。

友子 わたしは、生まれた時からずっと超能力を持つてるの。多分わたしの母から、そしてわたしのおばあさんから受け継いだものだと思うわ。わたしは、この力が神からのものだと信じてるの。

恵子 いいえ。それは神様からのものじゃないわ。もしあなたが、この力を拒否しないなら、片柳さん、あなた滅ぼされてしまうわよ。

ナレーション そう言い放ったのは田中恵子である。いつも物静かな彼女が、すごいこと言った、と思った。そう言えば、恵子はクリスチャンだった。それにしても、よくみんながするお化けやオカルトの話が、今日はやけに身近に感じられて、怖い気がした。
 その日の帰り道、“今日の夜もまた同じことがあったらどうしようか”と足取りも重く歩いていると、片柳さんに呼び止められた。

友子 ねえ、直美さん。つかぬこと聞くけど、あなたの誕生日、13日でしょ。金曜日だったわね？

直美 え？ 13日だけど、木曜日よ、今年は。

友子 ううん、違うの。あなたが生まれた時のこと。

直美 え？ わたしが生まれた時の曜日？

友子 そう。それが“13日の金曜日”。いい日だったわね。わたしたち、友達になれそうよ。

直美(モノローグ) なんだって？ 13日の金曜日？ そんな、縁起でもない。何が“いい日”よ。いい加減なこと言わないで。生まれた時の曜日なんて…。

友子 いい加減なことじゃないのよ。直美さん、おうちに帰ったら、お母さんにでも教えてもらってちょうだい。

直美(モノローグ) ギョ！ どうしてわたしの考えてることが分かっちゃったの？ この人、やっぱり超能力？

友子 そうそう、来週の修学旅行の夜、面白いもの見せてあげるわ。お楽しみに。それじゃ、さようなら。

直美 あ、さよなら。なーんだろ、あれ？ あ、いけね、修学旅行の買い物、忘れてた！

ナレーション それから4日後、九州へ3泊4日の修学旅行の日が来た。わたしは少し落ち込んでいた。それは、片柳さんの言った、わたしの誕生日の予言が当たっていい

たからだ。母に聞いたら、確かにそうだったのだ。“13日の金曜日”に生まれたわたしは、不幸な悪魔の子なんだろうか？ それと、もう一つ、修学旅行の夜の面白いものとは一体なんなのか？ 何かこう、“ゾク！”とするイヤな予感がしていた。

そして、その夜が来た――。

女子1 ワー、面白そう。どうやるの？

女子2 わたし、“コックリさん”て、やるの初めて！

子 やめたほうがいいわ。みんな、こんなこと、よくないわ。

友子 (かぶせて) やりたい人だけやればいいのかよ。恵子さんは向こうへ行行って！

恵子 (押し出される) あ、ちょっと、でも…。もう。

友子 いい？ じゃ始めるわよ。みんな、精神をここに集中して。指先に力を入れな
いで。そう、軽くね。心の中で、こう唱えるのよ…。(FO)

ナレーション どうとう始まった。片柳さんの言った“面白いこと”っていうのは、このことだったのか。盛んに止めてた恵子は、追い出されてしまった。わたし？ わたしはやはり興味があった。知らない世界をのぞくのはスリリングで、その誘惑には勝てない。しかし、一つだけ気になることがあった。片柳さんの指輪だ。それは、頭が小羊で、胸は女性の胸という、以前外国の映画に出てきた悪魔礼拝者が使ってたものによく似ているのだった。

友子 コックリさん、コックリさん、教えてください。これは…。(FO)

ナレーション 10分くらいたった。異様な雰囲気だった。何か、心に恐怖心が起こってきた。と、その時、彼女の様子に異変が起きたのだ。彼女は低い声で話し出し、まるで、そう、それはまるでキツネか悪魔が乗り移ったようだった。クラスは大騒ぎになった。

女子1 先生、先生！ 大変です。片柳さんが、片柳さんが！

先生 どうしたんだ？ 何があったんだ？

女子2 先生、助けて。片柳さんが！

先生 おい、片柳、しっかりしろ、片柳！

生徒たち (口々に) 悲鳴。

ナレーション 担任の先生も、何をどうしていいのか分からないようで、オロオロするばかりだった。そのうちに彼女はバタンと倒れて、引きつけを起こしたように、手足をけいれんさせ、白目をカッと開いて、口から泡を吹いていた。

直美(モノローグ) あれが、あれが“悪魔”なんだ…。

ナレーション わたしは、ワナワナ震えながら、そう思った。

(音楽) (ブリッジ)

ナレーション それから2、3日たった。

直美 ねえ恵子。あんたの言ったとおりだったわ、片柳さん。

恵子 残念だったわ。わたしがもっと強く止めていれば、あんなことには…。

直美 あ、何も恵子が責任感ることないさ。それに片柳さん、もうすっかり元気になったっていうし、よかったじゃん。わたしもちょっと気になることあったけどね。

恵子 なあに、気になることって？

直美 うん。あのさ、わたしの誕生日、生まれた時が13日の金曜日だったっていうの、当てられちゃったの。ヤじゃん、縁起悪くて。

恵子 あらあ、13日の金曜日がよくない日だなんて、別に何の根拠もないのよ。イエス・キリストが十字架に掛けられたのは、確かに聖書から金曜日だって分かるけど、13日なんてどこにも書いてないし、数字も根拠なし。だから、気になんかしなくていいのよ、直美。

直美 えー、ほんと？ そうなの？ クリスチャンの恵子が言うんだから、ほんとだね。わー、なんだ、心配して損しちゃった！

恵子 ね、直美。片柳さんのことで、わたし、“悪魔ってほんとに恐ろしいな”って、改めて分かった気がしたの。

直美 やっぱ悪魔なの？

恵子 そう、悪魔。悪魔は、神様につくられた天使が墮落したものなの。だから悪魔は、“人間が神様から離れるように、嫌うように”って、巧妙な策略を持って仕掛けてくるのよね。

直美 悪魔が、わたしたちに？

恵子 そう。わたしね、クリスチャンになる前から、ずっと、自分の一番の敵は、自分の中にいるって感じてたの。

直美(モノローグ) 自分の中に…。

恵子 始めは、悪魔とは知らなかった。ただ、自分の力が弱いから、自分の悪い心、だらしない心に負けてしまうんだと思ってた。

直美 あたしもそう。何か見えない力、わたしの中のもう一人の自分の力に縛られているような感じ。

恵子 それが悪魔なのよ。悪魔は、わたしたちの弱いところを強調して意識させて、それをもっと悪いほうへ引きずり込もうとするのね。それに甘んじてると、どんどん思うツボで深みにはまっちゃうのよね。直美にも気づいてほしいと思うな。

直美 ふーん。悪魔って怖いんだ。

恵子 ほんとにそう。そんな時、わたし、イエス・キリストを知ったの。弱くて汚い自分を、そっくりそのまま受け入れて赦^{ゆる}してくださいさるって。わたし、信じたわ。その時、ほんとに“あー、自由になれた”って感じた。

直美 そっくり、そのまま？ 自由…、自由か！

ナレーション 恵子の話に、いつの間にか自分自身をオーバーラップさせていたわたしは、心を洗われるような感動を覚えた。そして、恵子の勧めで、わたしたちは片柳

さんを恵子の教会の牧師先生に引き合わせることにした。稽古の信じている神様に、片柳さんを治してもらうために。

牧師 片柳さん。はっきりと申します。あなたは“占いの霊”に取り付かれています。

友子 はい、先生。そうかもしれません。わたしの母もおばあさんも占い師でした。

牧師 あなたは、この霊から解放されたいと願っていますか？

友子 はい。

牧師 片柳さん。わたしは、あなたがその超自然的な力を捨てて、イエス・キリスト、このお方のみがあなたを解放できることを心から信じてほしいと思います。さもないと、この悪霊が、今にあなたを殺すかもしれません。

友子 先生、お願いします。わたし、心の中のもう一人の自分と戦うのに疲れました。ほんとは怖いんです。わたしを助けて！

牧師 分かりました。では祈りましょう。「悪霊よ。イエス・キリストのみ名によって命ずる。この女から出ていけ。」

ナレーション それは、かつて見た映画「エクソシスト」を思い出した。その時、目の前に現れたのは、あの映画そのままの光景だった。

友子 (すすり泣き)

ナレーション 彼女は少し体を震わし、そしてすすり泣き始めた。

牧師 次の祈りを、大きな声でしてください。「わたしは、イエス・キリストが、わたしの罪のために死んでくださった神のみ子であられることを信じます。イエス様、わたしの生活の中に来て、それをあなたに喜ばれるものとしてください。

友子 わ、わたしは、あ、あ、あ〜〜〜！（祈りを妨げる力に苦しむ）

ナレーション 彼女は、約 3 分間ほど、その祈りをしようとして戦った。目に見えない手が、彼女のノドを締めているようだった。いつしかわたしも、心の中で必死に祈っていた。

直美(モノローグ) 神様、イエス様、片柳さんを助けて！ 悪魔を倒して！

友子 イエス様、信じます！

ナレーション ついに彼女は、声を出してその祈りをした。その時の光景を、わたしは一生忘れない。祈り終わるやいなや、彼女の表情が目の前で一変した。彼女は輝いてきた。

友子 先生、わたしは自由です。(多重エコー)

ナレーション そう叫ぶ片柳さんの顔を見ながら、わたしは、何か目に見えぬ圧倒的な力に、身も心も奪われたように、「神様って、イエス様って、生きてるんだ」と、心の中で何度もつぶやいていた――。

<完>